第1部　エッセイ

テーマ「思い出のお弁当」

小中学生の部

佳作

最悪のお弁当の思い出

市村　哲太

宙を舞う唐揚げ、アスファルトの上を転がるおにぎり、プラスチックの割れる音、これが僕の覚えている最初の思い出だ。

あれは、まだ保育園に入る前のことだった。三つ上の姉が遠足でお弁当を持って行くことになり、新しいお弁当箱を買ってもらった。僕はそれがとてもうらやましくて「いいなあ。お姉ちゃんにだけずるい。」と母に毎日のように言っていた。

そして、遠足当日になった。「哲ちゃん、来て」朝早く目覚めていた姉に起こされ、台所に行くとそこには、お弁当が二つ並んでいた。姉のピンクのお弁当箱の隣にもう一つ。水色で僕が好きなドラえもんの絵が描かれたお弁当箱、そう、僕のお弁当だ。ふたを開けると、お花みたいなウインナー、カラフルなおにぎり、唐揚げ、玉子焼き、ミニトマト、ぶどう・・僕の好きなものがギュウギュウに詰まっていた。それは、まるで宝箱のようだった。僕は、嬉しくて、「おじいちゃんとおばあちゃんに見せてくる」と、パジャマのまま、離れに向かって駆け出した。途中の坂道で僕のサンダルが石につっかかった。その瞬間、僕の手からお弁当箱が離れた。「あっ」と思った時には、お弁当箱は下に転がり、中身は全て、飛び出していた。慌てて拾い上げると、お弁当箱にはひびが入っていた。僕はそれを手に持ち、大泣きしながら来た道を戻った。そんな僕を見て、母は驚いていた。せっかく作ってもらったお弁当を落としてしまい、怒られると思ったが、母は笑っていた。そして、お弁当の残りを別のお弁当籍に詰めてくれた。母があんまり面白いことのように笑うので、僕も気がついたら笑っていた。

その日のお昼は、祖父母と一緒に外でお弁当を食べた。朝の出来事を話しながら、祖父母もとても楽しそうに笑っていた。僕も楽しかった。最悪のお弁当の思い出が、家族の笑顔でいつの間にか、最高のお弁当の思い出に変わっていた。